

実習報告（基盤教育実習）

「多様性・主体性・個別最適な学びが実現できる授業」についての研究 —知的障害特別支援学校での実践を通して—

上地 梨音（子ども支援探究コース 特別支援教育系）

【探究実習のテーマと設定の理由】

○探究実習のテーマ

「多様性・主体性・個別最適な学びが実現できる授業」についての研究
—知的障害特別支援学校での実践を通して—

○テーマ設定の理由

文部科学省（2022）は「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」を公表し、小中学校の通常学級に在籍する子どものうち、8.8%が「学習面又は行動面で著しい困難を示す」ということが明らかにされた。そして、今後、全ての教師に求められる専門性として、指導方法を工夫できる力や特別支援教育に関する基礎的な知識、合理的配慮に対する理解等が必要なことが示された。また、中央教育審議会初等中等教育分科会（2012）は「共生社会に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」の中で、「インクルーシブ教育システム」において、障害のある子どももいない子どももできるだけ同じ場で共に学ぶことを目指すよう示した。このように現在、通常学級では特別支援教育の視点を生かしたインクルーシブ教育の推進が求められている。しかし、古村（2021）は、通常の学級では、障害のある子どもが単に通常の学級にいる状態である「ダンピング」に陥りやすく、このような課題を解決するため、通常学級における授業づくりは早急な検討が求められていると指摘している。これらを踏まえ、今後は児童生徒の多様性が尊重される環境が前提であること、主体的に学び合うこと、児童生徒の認知や特性に合わせた個別最適な授業設計を行うことが重要であると考えられる。

本実習では「多様性・主体性・個別最適な学びが実現できる授業」を、インクルーシブデザインの視点から検討していきたい。また、この報告書では「多様性・主体性・個別最適な学びが実現できる授業」を、障害の有無に関係なく児童生徒がそれぞれの違いを認め合う環境で、積極的に学習に取り組み、自分に合った学び方を選択できる授業と定義する。

【探究実習の研究目標】

- (1) 観察や担任団の情報から知的障害特別支援学校における指導・支援の工夫について学ぶ。
- (2) インクルーシブデザインの視点で、多様性・主体性・個別最適な学びが実現できる学習環境や活動内容を探る。

【探究実習の概要】

実習校名称	A 特別支援学校
実習期間	2023年8月29日～2024年1月23日（計20日間） ※2023年10月14日 体育祭
実習内容	・各教科等（体育，図工，音楽，生活単元学習）の授業参観や授業における実際的

	な指導・支援 ・ 主担当として図工の授業実践（4 時間）
--	---------------------------------

【探究実習の成果と課題】

本実習では、小学部 4 年生で各教科等の授業参観や主担当として図工の授業を行った。

研究目標（1）に関する成果として以下 2 点が挙げられる。まず、スケジュールや手順書を用いて、児童が見通しを持って主体的に活動できるようにしていたこと。次に、児童一人ひとりの実態に即した活動を設定し、適切なタイミングで必要最低限の支援を行っていたことである。実習のなかで、実態把握の難しさを痛感し、実態把握を目的としたかかわり方ではなく、関係づくりに視点をいたかかわり方が重要であることを学んだ。指導方法や支援を検討する前段階に、児童と信頼関係を構築するという重要な段階があることを念頭に置き、次年度もこのようなかかわり方を続けていきたい。

研究目標（2）において、図工の授業実践を行い、以下 2 点の成果を得た。

1 つ目の成果としては、一斉授業ではなく、児童それぞれの認知や特性に合わせた活動を考えることができたことである。具体的には、児童の特性などに応じて作品を完成させるための道具の選択肢を提示することができた。しかし、事前の想定と授業での児童の様子が異なっていたため、学習環境と活動量が適切ではなく、授業中に児童が待つ時間が生まれてしまった。さらに、その時間に問題行動も引き起こされてしまった。この反省から、授業において選択肢を用意しておくことが重要であると改めて感じた。今後は、授業で使う道具の準備を児童と一緒にすることや、活動が早く終わった児童は、先に片付け作業に移るなど、児童のペースで主体的に活動を進めていける環境や活動内容を設定していきたい。このような活動を組み込んだ授業設計を行うことで、授業での待ち時間が無くなり、児童にとってより学びある活動になるだけでなく、問題行動も減らすことができると考えられる。

2 つ目の成果は、インクルーシブデザインの視点に立って授業設計を行ったことで、1 人の児童のために用意した教材教具が他の児童の活動の一助にすることができたことである。このようなインクルーシブデザインの視点に立った授業設計を行うことで、「多様性・主体性・個別最適な学びが実現できる授業」が実現できると考える。

以上のことから、授業において活動や道具など様々な選択肢を準備しておき、児童のニーズに応じて活動を柔軟に変更・修正していく必要があるということが分かった。

今年度の実習全体を振り返り、知的特別支援学校での児童の実態や実態に即した指導・支援がどのようなものを学ぶことができた。そして、そのような指導・支援の工夫を支える実態把握は、児童との信頼関係を構築するところから始まるということが分かった。次年度は、今年度の学びを生かし、児童の実態に即した「多様性・主体性・個別最適な学びが実現できる授業」を目指し、環境づくり、指導・支援の工夫を検討していきたい。

【参考文献】

- 古村真帆（2021）通常の学級における知的障害特別支援学級在籍児童の授業参加 一『学び合い』・自由進度学習を取り入れる学級の事例研究一、SNE ジャーナル 27(1), 98
- 文部科学省（2022）公表資料「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」（最終閲覧日:2024 年 1 月 22 日）
- 文部科学省（2012）中央教育審議会初等中等教育分科会資料、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）（最終閲覧日:2024 年 1 月 22 日）